

南九州貝殻文系土器の組合せに関する覚え書き

黒川 忠 広

A Memorandum about an Assortment of Potteries
with Shell-impressed Decorations in South Kyushu

Kurokawa Tadahiro

要旨

南九州貝殻文系土器は、南九州の縄文時代早期前半を代表する土器群で、近年の発掘調査によって多くの資料が蓄積されている。この土器群には、円筒形・角筒形・レモン形という三つの器形が存在し、型式学的連続性やその分布状況などから南九州の独自性を示すものと考えられる。しかし、多くの資料は円筒形か角筒形に分類しなくてはならない状況が長く続き、レモン形に関して具体的に論究されることはなかった。小稿においては、この中でもレモン形を中心に三者の関係をより具体的にするため、南九州貝殻文系土器の組み合わせに関して自分なりに研究の方向性を確認する上で覚え書きを記したものである。

キーワード：南九州貝殻文系土器、円筒形・角筒形・レモン形、平口縁と波状口縁

1 はじめに

南九州貝殻文系土器は、南九州の縄文時代早期前半を代表する土器群で、近年の発掘調査によって多くの資料が蓄積されている。この土器群には、円筒形と角筒形という2種類の器形が存在し、両者は共伴関係にあることが型式設定時から述べられている（河口1955）。高度経済成長に伴い、大規模開発とそれに伴う大規模な埋蔵文化財発掘調査が始まると、資料の蓄積や研究の深化はより著しいものとなった。また、アカホヤ火山灰層の発見によって従来の編年観が大幅に修正されたのである（新東1980）。今回のテーマである南九州貝殻文系土器の組み合わせに関しても、新資料の発見があった。すなわち、口縁部上面観がレモン形を呈する土器（以下レモン形と省略）の発見である。

いわゆるレモン形が初めて資料化されたのは、鹿児島市加果山遺跡である。この後、栗野町山崎B遺跡や金峰町宇治野原遺跡等においても確認されてきた。だが、資料としての判断はある程度接合が進んで全体の様相が判明しない限り、円筒形であるか角筒形であるのか、あるいはレモン形であるのか判別が困難であり、多くの資料は円筒形か角筒形に分類しなくてはならない状況が長く続き、このレモン形に関しては具体的に論究されることはなかった。

この状況の中、筆者等は加果山遺跡の資料について報告書刊行後に新たに接合したことで全体の様相が判明したものを中心に資料紹介をおこない、レモン形を呈する資料の位置付けについて述べたことがある（黒川・桑波田2000）。

小稿では、このレモン形を中心に南九州貝殻文系土器の各土器型式の組合せに関して、論究を進めるに当たっての覚え書きを記したものである。¹⁾

2 レモン形とは

レモン形とは、その名が示すとおり口縁部もしくは底部の形状が果物のレモンのように見える土器のことである。俗称的に用いたものであり、口縁部に2カ所の角頂部がほぼ対角線上に形成されるものである。レモン形が見られる南九州貝殻文系土器の各土器型式ともに底部に至るまでレモン形を呈するものが多いが、前平式土器段階のものには胴部上半で円筒形化しているものもある。口縁部に角部を形成する点から、広義の角筒形に属するものと思われる。

文様は、レモン形のみ特徴的な手法が採られているわけではなく、セット関係にあるとされる円筒形若しくは角筒形と同一の施文である。

内面調整は、各土器型式の特徴をそれぞれ有している。例えば、加果山式土器の口縁部内面にはミガキ手法が明瞭であるが、前平式土器のそれには見られない。角部周辺の調整は角筒形と類似し、角部には履位の調整が、角部周辺では角部へ向かうように下から上へと調整が施されている。

現段階で不明な点は、その初現である。角筒形の発生と同じくレモン形も発生しているのか、それ以前若しくはそれ以後なのか、前平式土器がこれまで以上にまとまって出土する遺跡の発見を待たなくてはならない。

第1図と第1表は、現在筆者が知り得た限りでのレモン形を呈する土器の出土遺跡の集成である。これで見ると、南九州一帯に広く分布していることがわかる。また、型式別に見ても前平式土器の段階での宮崎県の様相がレモン形に関して捉えきれなかったが、加果山式土器に関してのレモン形の分布は円筒形や角筒形と同様の分布である。この

番 号	遺 跡 名	所 在 地	前	志	加	小	吉	岩	倉	石	備考
			平	風	栗	牧	田	上	坂		
1	鷹爪野遺跡	川辺郡川辺町									未報告
2	水野遺跡	川辺郡加賀町永原	○								
3	宇山野原遺跡	日置郡金峰町			○						
4	高島平田遺跡	日置郡金峰町									未報告
5	前原遺跡	日置郡松元町									未報告
6	市ノ原遺跡	日置郡東市来町通田									未報告
7	加栗山遺跡	東尾島市川上町			○	○	○				
8	鎌倉城跡	始良郡始良町									未報告
9	山崎B遺跡	始良郡栗野町山崎				○					
10	上野原遺跡2・3地点	国分市川内			○						
11	大中原遺跡	肝属郡根占町					○	○			
12	札ノ元遺跡	宮崎郡田野町			○						未報告
13	藤原野第2遺跡	宮崎市細江			○						

第1表 レモン形出土遺跡一覧

ことは、北への分布圏拡大が加栗山式土器をピークとしている状況と大差がないと考えられる。以前に述べたことではあるが、この状況は小地域での突発的な現象ではないことを示し、型式学上連続性が窺えるのである。これらの事象から、南九州貝紋文系土器の前平式土器から岩之上段階にかけては、円筒形・角筒形・レモン形という3つの器形が存在していたと考えられるのである。

3 各段階ごとのレモン形

現段階での三者の変遷を見ていきたい。南九州貝紋文系土器は、円筒形のみを有する岩本式土器が最古の土器型式として位置付けられている。器形のバリエーションが展開するのは、岩本式土器の次に位置付けられている前平式土器になってからである。

前平式土器の理解の範囲によっては違ってくるのであろうが、前平式土器には円筒形のみが段階が初めに存在しているものと思われる。次に、田代町荒田原遺跡のような角筒形をセットとして有する段階があり、円筒形・角筒形・レモン形の組合せが見られるようになるものと思われる。つまり、遺跡の調査範囲によって得られるデータに差が生じるが、3つの器形の有無を検討することで前平式土器には少なくとも2つの段階が設定される可能性が高いのである。

この次の段階としては、加世田市志風頭遺跡や始良町建昌城跡出土資料が位置付けられるのであるが、検討資料が極めて少数であるために全体像が掴みきれていない。ただし、前後の段階には円筒形・角筒形・レモン形の三者が揃っているため、この段階でもそれに近い状況であることが想定できる。

ところで、これまでの前平式土器における円筒形・角筒形のセット関係に関しては高橋信武によって疑問視する考えが示されている(高橋 1998)。また、調整技法を基に南九州貝紋文系土器を検討した上杉彰紀は、前平式土器を調整から古段階と新段階とに分けこれに続く土器型式を志風頭式土器と仮称している。この論考の中で上杉は、従来前平式土器の角筒形として位置付けられていた一部の資料に



第1図 レモン形出土遺跡位地図

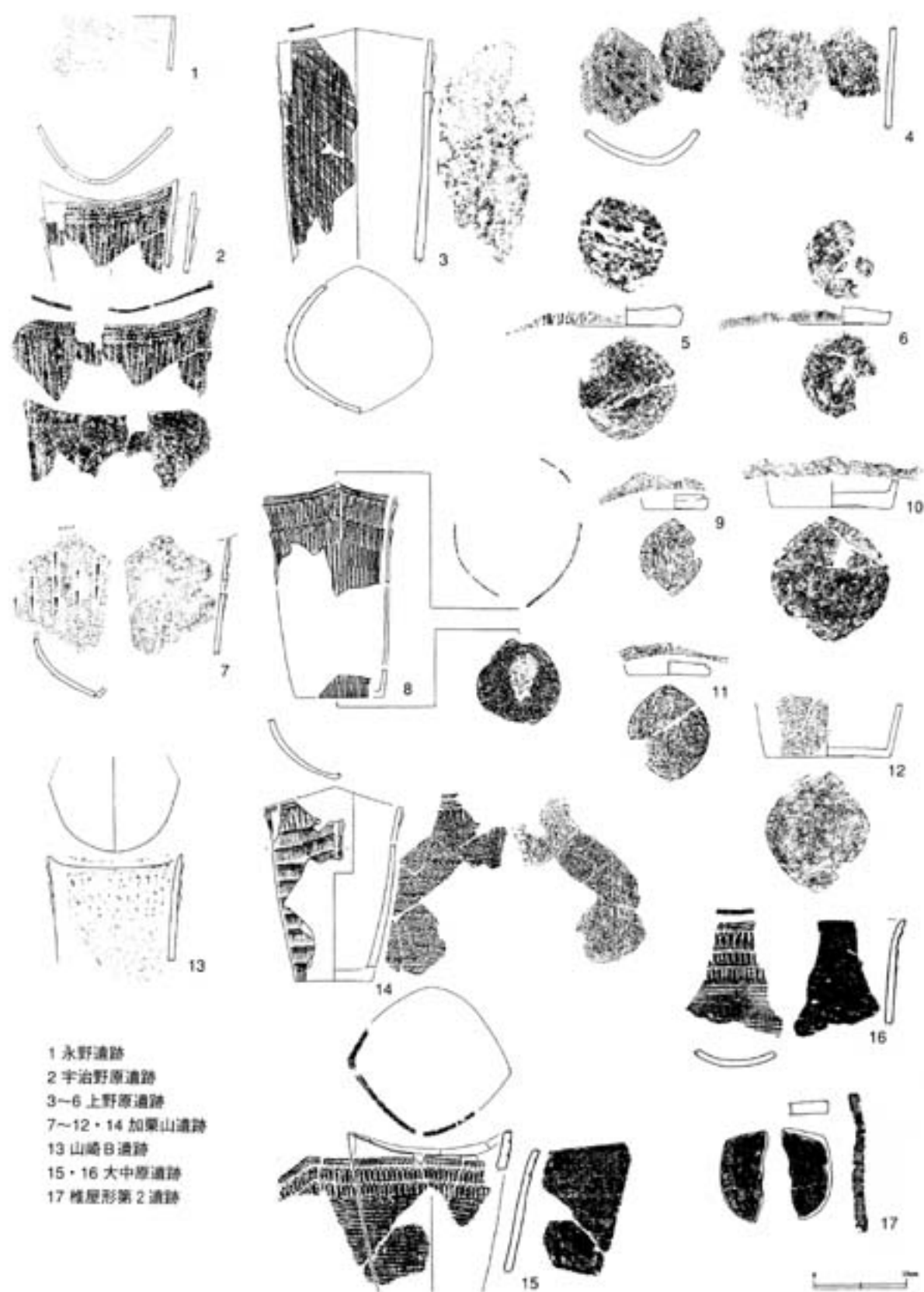
ついて、「内面ケズリ調整」と「文様構成」から志風頭式土器の範疇であることを述べている。加えて、角筒形の初現を「山崎B遺跡や榎崎A遺跡などの従来前平式土器とされてきた角筒土器が志風頭式土器として独立するとすれば、前平式土器の角筒土器の実態は桑ノ丸遺跡出土資料に求められることになろう」と推察している(上杉 2000)。

これらの土器群の次には、加栗山式土器が続く。貼付文の形状やその有無、口縁部内面の調整法、口縁部の文様構成や胴部の貝紋刺突文の間隔などで細分が可能であるが、小稿の目的上大枠の中で考えたい。この段階は角部形成がはっきりとしており、口縁部から底部に至るまで明瞭な角部を形成する。これは角筒形・レモン形に共通する部分である。この点に関しては、加栗山式土器に角部形成の過渡期的様相を示すものが見られないことから、前段階である志風頭段階において角部形成が口縁部から底部に至るまでなされるようになったものと考えられる。文様構成や内面調整に関しても、円筒形の特徴がほぼそのまま対応する。

次に、胴部施文が密接な貝紋刺突文の段階が続く(黒川・桑波田 2000)。前迫亮一によって小牧ⅢAタイプと呼ばれている土器群である(前迫 2000)。出土量の豊富な指宿市小牧ⅢA遺跡においては三者全ては揃ってはならず、三者が揃っている遺跡名を挙げれば加栗山遺跡等が挙げられる。

次に吉田式土器が続く。加栗山遺跡や根占町大中原遺跡で良好な資料が見られる。この段階では角筒形・レモン形の角部形成は先の加栗山式土器や小牧ⅢAタイプと比べると曖昧なものへと変化しているものが見られる。例えば、加栗山遺跡の角筒形やレモン形は外面こそ角部を形成してはいるが、内面に関してはやや丸味を帯びているという特徴が見られる。

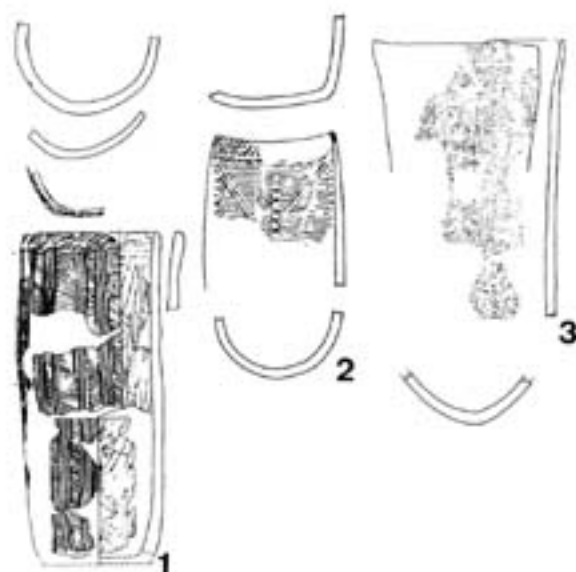
ここで貼付文に注目してみたい。貼付文には、粘土様状



第2図 各遺跡出土のレモン形

のものとクサビ形状のものがあり、吉田式土器の段階になると粘土様状のものは見られずにクサビ形状のものでより密接していくという特徴がある。さらに、この密接するクサビ形貼付文は、実際に貼付するもの他に、刺突文などによって貼付文を表現しているものがあり、この点に関しては、吉田式土器の細分を行った河口（河口 1989）や新東（新東 1989）も指摘している。レモン形においても両者が確認されており、このことから吉田式土器の後半すなわち岩之上段階¹¹までは3つの器形の組み合わせが成立していたものと考えられるのである。

この他に、岩之上段階のものとして、西之表市日守遺跡では2種類の波状口縁が出土している。これは、吉田式土器の段階になって角部形成という概念が急速に崩壊し始めることを示唆していると考えられる。この要因は何であろうか。角筒形の発生が、口縁部に「角」を設けることに端を発し、装飾性が徐々に高まり角部形成が華麗なものへと変遷したとするならば、装飾性の追求が終わり、また、実用の面でも角部形成を必要としなくなったために起こった崩壊現象として捉えることが出来るのではないだろうか。これは、吉田式土器における角筒形の個体数の減少からも想定できると思われる。なお、倉園B式土器においては、角筒形は確認されていないことから、現時点における円筒形・角筒形・レモン形という器形の組み合わせは、吉田式土器の岩之上段階までは存続していたことがうかがわれ、波状口縁に関しては吉田式土器の岩之上段階で発生していることが指摘できるのである。



第3図 上角下円筒を呈する資料

4 南九州貝紋文系土器の組合せに関する覚え書き

南九州貝紋文系土器の組み合わせに関しては、レモン形も含めて解決しなければならない課題が多い。これらの器形はそれぞれ密接な関係にあり、例えば口縁部のみ角部を形成し、胴部においては角部を形成しない資料の存在も既に指摘¹²されている（第3図）。その結果、角筒形であっても円筒形に分類されてしまっているケースも存在する。これは、三者の関係が単純に理解・解決されるものではないことを暗示していると共に、資料化する段階での入念な遺物観察が求められるものと理解したい。現に、円筒形と角筒形のセット関係についても具体的に論究されたことは少なく、両者の比率に関しても漠然としたものでしかないのが現状である。今後、この南九州貝紋文系土器の研究を進めていくにあたり、自分なりの問題意識を覚え書きとして記しておきたい。

まず、全ての事項に共通する基本的なことであるが、資料の観察が挙げられる。これまでのように円筒形が角筒形かではなく、判断が難しい場合や不自然な横断面が見られる場合には、何らかの表現を用いて区別する必要がある。この場合、レモン形を呈する資料である可能性も考えられる。内面調整に関しては、円筒形の場合には口縁部の内面調整は横位を基本とするものであるが、角筒形やレモン形の場合、角部へ向かう斜位の調整痕が見られる。この特徴を観察することで、破片であってもある程度器形を推察することが可能である。

次に、前平式土器の細分を行う必要がある。先に述べたが、角筒形やレモン形の発生が前平式土器に求められる以上、前平式土器には円筒形のみが段階が存在しているものと思われる。この前平式土器のどの段階で角筒形が発生したかという問題は、角筒形という極めて地域色の強い土器が、南九州内で発生し変化していったことを裏付けると共に、南九州の地域性を考える上で極めて重要な問題となるのである。

次に、倉園B式土器・石坂式土器の波状口縁に注意を払いたい。一見、器形の組合せとは何の関係も見いだせないかもしれないが、石坂式土器には4つの波頂部を有する口縁部と2つの波頂部を有する口縁部、それに平口縁を呈する口縁部の三者が確認されている。吉田式土器の岩之上段階の資料にも、この三者が良好な状態で出土している例もあることから、円筒形・角筒形・レモン形という三者の関係の延長線上で論じることが可能と考えるからである¹³。また、報告されている資料によっては、波状口縁ではあるが波頂部が2か所であるのか4か所であるのかはっきりとしないものもある。特に小破片での区別が困難であり、2種類の波状口縁があることを意識して分類及び表現をおこないたい。

さて、石坂式土器には瘤状突起が付くものがあり、前迫亮一によって石坂式土器新段階に位置づけられている（前



第4図 石板式土器の無文土器

迫 1993)。前迫の指摘によると、「典型的な石板式土器ともいえる古段階のもの多くは、外反する口縁部に2ないし4か所の頂部をもついわゆる山形口縁の形態を呈している。(中略)この石板式土器古段階を代表する山形口縁こそ瘤状突起の祖形ではないかと考えられる」と述べ、その初源について言及している。組み合わせという視点で石板式土器を見ると、石板式土器新段階においては、波頂部の肥厚を祖形とする瘤状突起の付くものと波頂部を有しない平口縁のものがセットとして存在している可能性も考えられるのである。また、石板式土器においてはしばしば無文土器も出土している。無文土器は、南九州貝殻文系土器においては筆者の知るところほとんど例が無く、石板式土器以前の段階では現在のところ見受けられない。石板式土器に関しての無文土器出土例(第4図)も決して多くはないが、

石板式土器においては無文土器が有文土器とセットをなしていたとも考えられる。

最後に、波状口縁の桑ノ丸式土器がほとんど見られない点を挙げたい。下割形式土器に関しては、波状口縁や瘤状突起の付くものなどが見られることから、石板式土器との連続性が窺える。この点で考えると、桑ノ丸式土器の段階ではすでに波状口縁という概念が消失している可能性が指摘できよう。また、この両者と共に押型文土器が出土する遺跡例が多いが、このような南九州貝殻文系土器の変化は押型文土器との接触によって生じた可能性が考えられる。また、押型文土器にも平底化や波状口縁の出現などの変化が生じている。このことから、縄文時代早期中葉の南九州において使用する器の形や文様に変化が生じていると捉えられるのである。

5 おわりに

南九州貝殻文系土器の研究は多くの研究者によって進められ、その様相は広く知られるようになった。だが、レモン形をはじめセット関係など多くの問題点を抱えていることも事実である。

先に述べたように、南九州貝殻文系土器に関してはこれまでのように円筒形か角筒形のいずれかに分類をするのではなく、レモン形という器形が存在していることも視野に入れ、特に小破片に至っては器形の判断は慎重に行わなくてはならない。これらの問題を解決するにはまだ浅学であるが、組み合わせに関して自分なりに研究の方向性を確認する上で覚え書きを記した。

まとまりを欠く内容ではあるが、今後とも精進していきたい。御指導いただければ幸いです。

【註】

- 1) 本稿において用いる組み合わせもしくはセット関係とは、型式の範疇というやや広義の意味合いで用いており、厳密な意味の同時共存を述べているわけではない。
- 2) 新東は、岩之上式土器と呼んでいる(新東 1989)。
- 3) 新東晃一他 1978 『桑ノ丸遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 4) 円筒形と角筒形の関係に関して述べたことがある。この時点では、平口縁と波状口縁についてのみ触れた(黒川 2000)。これ以降にレモン形を実見する過程で円筒形・角筒形・レモン形→平口縁・4か所の波頂部・2か所の波頂部という関係を推定した。

【引用・参考文献】

- 鹿児島県教育委員会 1981 『加栗山遺跡・神ノ木山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 知覧町教育委員会 1983 『水野遺跡』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 上杉彰紀 2000 『調整技法からみた縄文早期貝殻文土器』『南九州縄文通信』No.14 南九州縄文研究会



第5図 3つの器形の組み合わせ

- 河口貞徳 1955 「鹿児島県における貝殻系灰文土器」『鹿児島県考古学会紀要』第4号 鹿児島県考古学会
- 1989 「吉田式と前平式のその後について」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会
- 黒川忠広・桑波田武志 2000 「鹿児島市加栗山遺跡資料の紹介～新たな接合資料を中心に～」『大河』第7号 大河同人
- 黒川忠広 2000 「南九州貝殻系土器研究の現状と課題」『大河』第7号 大河同人
- 新東晃一 1980 「火山灰から見た南九州縄文早・前期土器の様相」『古文化論叢』鍋山猛先生古希記念
- 1988 「南九州の円筒土器と角筒土器～前平式土器と吉田式土器の型式概念をめぐる諸問題～」『鎌木先生古稀記念論集 考古学と関連科学』鎌木先生古稀記念論
- 1989 「早期九州貝殻系土器様式」『縄文土器大観』小学館
- 高橋信武 1998 「前平式土器について」『鹿児島考古』第32号 鹿児島県考古学会
- 前迫亮一 1993 「石版式土器に見る型式変化の方向性について～瘤状突起出現の意味するもの～」『大河』第4号 大河同人
- 根占町教育委員会 2000 「大中原遺跡」根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- 鹿児島県教育委員会 1982 「山崎B遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(18)
- 金峰町教育委員会 1992 「宇治野原遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 加世田市教育委員会 1999 「志風頭遺跡他」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 始良町教育委員会 2002 「建昌城跡」始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

【資料出典】

- 第1図 筆者作成
- 第2図1 知覧町教育委員会 1983 「永野遺跡」知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 2 金峰町教育委員会 1992 「宇治野原遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 3～6 鹿児島県埋蔵文化財センター 2002 「上野原遺跡2～7地点」鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告(41)
- 7～12・14 黒川忠広・桑波田武志 2000 「鹿児島市加栗山遺跡資料の紹介～新たな接合資料を中心に～」『大河』第7号 大河同人
- 13 鹿児島県教育委員会 1982 「山崎B遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(18)
- 15・16 根占町教育委員会 2000 「大中原遺跡」根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- 17 宮崎市教育委員会 1996 「椎原形第1遺跡11号」
- 第3図1 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2000 「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報」14
- 2 鹿児島県教育委員会 1978 「桑ノ丸遺跡他」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 3 鹿児島県教育委員会 1991 「小中原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(57)